

‘ο κόσμος, αλλοίωσις’ ο βίος, υπόληψις.’

75号 1993.12.20

文・編集・発行

恋 怪 子

LIVE: THE RANKERS 1993.10.7 高円寺屋根 棟Ⅱ

LIVE: DR. WOLF 1993.10.7 高円寺屋根 棟Ⅱ, 11.21 西武 雑貨 WATTS
11.30 新宿 アンティノック



左から ドラム、ギター、ヴォーカル、ベース

「多くのバンドで年に1,2回ツアーで東京に来る。そのたびにききにいられて、いままでに6,7回ライブに行っているけれど、この日のライブはそのなかでもとびぬけて、けたはずれにすごいものだった。この日、THE RANKERSの前にやった、DR. WOLFというはじめてのバンドもとてもよくて、その余韻がまだあるうちに次のすごいのがやって来たって感じだった。

ギターが鳴ったとたん、「えーっ、なにこのすごい?!」ってなった。なにしろギターがものすごくかたづけられ、ヴォーカルもよく歌詞がききとれて、となりのギターのものすごいにきこまれていなくて、淡々とした感じすらあってよかったし、ベースもドラムももちろんバキバキきまっている。

あまりのすごさに「ワオ!」とか、「すごい」とか、「なにこれ?」とか声をたてながら笑ってしまったほど。「歓喜」というのはああいう状態のことをいうのだろう。あのギター、人間業とは思えなかった。この世のものと思えなかった。きいているほうもこの世にはいなかった。

コリン・ウィルソンが著書「至高体験」の序論に「至高体験は、一種の全き悦びの噴出、純粋の幸福の瞬間へと向かう。『至高体験者』とは、用意のエネルギー・タンクに大量のエネルギーを備えている人びとのことである。退屈した惨めな人びとは、即座に用いるエネルギーを少量しか保てない人びとである」と書いているが、あれは正確に至高体験だったといえる。99分、ステージの4人もそうだったのではないだろうか。至高体験という面からいって、もしかしらこの日のTHE RANKERSは、いままでに私がライブハウスできいた何回というライブのなかでいちばんすごいライブだったといえるかもしれない。

あんなギターをやったあと、どうやってもとにもどるのかと、余計なお世話の比喩までしてしまった。

10月7日にはじめてDR. WOLFをきいたとき、まっアスの人に目がいった。体をほとんど動かさずにベースをひいているのが実に印象的で、そのハヴィな音色に耳をかたむけていると、それにまぎらえてストレートでリッチなギターのメロディーがきこえてきた。そして、ドラムのビートが心地よくひびいて、いいなあ。…しばらくして、やっほヴォーカルもなかなかきかせるってことに気がついた。押しの強くない、どちらかというど頼りなげなヴォーカルなんだけれど、歌詞もよくて、だんだんきこまれていって、終わったときには次のライブに行こうと決めていた。

2回目は11月21日のWATTSで、この時は仲間のバンドの企画とかで中間内の1日の感じがしてあまりよくなかったけれど、またライブに行きたいとは思った。

11月30日、アンティノック。悲しみと喜びがせつないほどあった。音楽は短時間でなれどゆたかなものを生み出すことである。待っていたかいいかあった。3曲目にやった「嵐吹く」は「お前にこのオレに嵐吹く 嵐が心の奥底に吹き荒れる」という歌詞で終わる。きいているものの心にも嵐が吹き荒れる…。と、7月の曲が「ぬれながら」で、軽やかなメロディーによって「楽しみにしていた 待ちどうしかった 今日がその日さ 緑のある落ち着くところへ自転車に乗って…」という歌詞がきこえてくると、嵐は消えて、こっちもピクニック気分。そして、「ジャングルジム」。DR. WOLFのなかでいちばんはじめに覚えた曲で、いちばん好きな曲。「そしてまた冬がやって来たのさ 振れ出さずにいる人にも かまわず ジングルベルがうすら笑ってる オレは今もジャングルジムの中。」いまの季節にぴったり! 悲しみと喜びの絶妙なブレンドでいい気分になってライブが終了した。



左から ドラム、ギター、ヴォーカル

ライブハウスのライブにはたいてい3~5くらいバンドがでるけれど、自分のめあてのバンド以外でもいいバンドに出会えるチャンスがあるから、まあ、めあてにないけれども、なるべく他のバンドもきこぶようにしている。そうやっていくつもいいバンドをたのむことができた。DR. WOLFも10月7日にTHE RANKERSと屋根棟Ⅱにききにいったときにはじめてきいて「いいなあ」って思ったのがはじまり。ちなみにTHE RANKERSも他のバンドをききにいられて矢口だったのである。

WORDS: ヴァン・リード (リヴィング・カラー)

キング・クリムゾンのロバート・フリーツのインタビューに答えて。(「PLAYER」1993年9月号)



芸術と商業主義の問題は興味深いものだし、難しい問題だね。俺は、ミュージシャンには2つのタイプがあると考えている。まず「職人」としてのミュージシャンがいる。つまり、彼らは単に得意なものだと分かったから音楽をやっているんだ。あるいは、昔から続いている音楽一家に育ったのかもしれない。職人的なミュージシャンは音楽を自分の外部にあるものと考えているから、何かの必要性や目的のために自分の才能を売ることにあまり問題を感じないんだ。ひたむきさや情熱がないとか、良くないことだとか、決してそういう意味ではない。ただ、これは商売なんだ。音楽を愛しているかもしれないが、彼らにとっては音楽とは決して離れ難いものではないんだ。

もう一つのタイプは、それしかないから音楽をやっている。内なる叫び声だよ。音楽は彼らにとって必要不可欠な要素なんだ。俺は後者に属していると信じている。俺が音楽を選んだんじゃない。音楽が俺を選んだんだ。音楽がそれほど個人的な経験になると、商業目的に変えるのは難しくなってしまう。

俺がローカル・ダンス・バンドで演奏を始めた頃は、音楽で食べていけたらどんなにクールだろう、ということばかり考えていた。だがプロのミュージシャンになりたいと切望していたのと同時に、自分でやりたいようにやるべきだし、決して妥協してはいけないということも知っていた。おかげで、状況はさらに困難になったよ。

自分が何をプレイしたいのか、どういう人達のためにプレイしたいかを知っておくことが、ミュージシャンにとって大切なことだ。主流から外れようとするなら、オーディエンスは小人数だろう。主流から離れたところにいたいのに、主流並みの評価を受けたいと思っているミュージシャンが大勢いるよ。でも両方を満たすのは不可能さ。オーディエンスの数が限定されるのを嫌っている、フラストレーションと怒りが蓄積されるだけだ。

「STEIN」では何も妥協しなかったと思う。ロックンロールは信頼と誠実だ。ひとたびオーディエンスの心の中に入り込むことができれば、神聖なる信頼を勝ち取ることになる。その信頼を尊重するなら、偽物のレコードを作ることなんて絶対に不可能だ。ロックのオーディエンスは物事によく精通しているから、騙そうとしてもお見通しだ。

「STEIN」は前2作から派生したアルバムさ。俺達はただ、リヴィング・カラーが持っているアイデアの焦点を絞り活性化させようとしただけなんだ。同じことを繰り返してばかりはいられない。成長しなければいけないし、うまく行けば、オーディエンスもその努力を喜んでくれるよ。

売れそうなるレコードを発売して、それが成功したら方向転換をして好きなことをやればいい、と思っているバンドもいるようだが、それは間違った考え方だと思う。自分の気持ちに正直に行動するべきだよ。やりたくないことで成功を取っても後悔するだけだ。それに、あるタイプの音楽でオーディエンスを獲得しておいて突然方向転換したら、多くの人々の楽しみを奪うことになるし、彼らに拒絶されることになるだろう。

今では「クラシック・ロック」の範疇に入れられているバンドの多くが、かつては非常に過激だったんだから面白いよね。キング・クリムゾン、レッド・ツェッペリン、ジミ・ヘンドリクス…皆、コンスタントに新しい体系を發明していたよ。彼らは統計も、何が流行かも気にしなかった。今のロック・シーンの本当の危険性は、まるで俺達の親達のように保守的になっていく点にある。今のシーンは、古くてヨゴボの考え方をしているよ。「ロックは不滅だ」なんていうのは愚かな考えさ。常に新しいものを作り出して行かない限り、そして生命をきらめきを見つけようとする努力しない限り、次かその次の世代で滅ばないという理由は見つからないよ。古臭い態度や考え方は何の役に立たない……それどころか笑いのものだよ。